

ジルに渡った移民だけでなく、アルゼンチン、ボリビア、ボルネオ、チリ、キューバ、パラグアイ、ペルー、米国などへの日系移民に関する写真資料も見ることができた。それによって、日系移民に対する私の見方や考え方の幅が広がった。ヤマガタさんと田中さんが私の希望に積極的に対応して下さったことに感謝する。

東京都写真美術館も訪ねたが、そこで最も役に立ったのは壮大な図書室だった。この図書室では2日間リサーチをすることができたが、数ヵ月でも過ごせる気がした。

このほか、神奈川大学図書館と日本常民文化研究所図

書室も役に立った。

これら3つの図書館・図書室で、私はブラジルでは入手できない多数の有益な資料を発見した。その結果、私は自分の参考文献目録と一般知識を増やす機会を得たのである。

皆さんにたいへん寛大かつ協力的に対応していただき、私としては、第二の故郷にいる感じがした。幸運にも日本で研究する機会を与えられ、また、その機会を最大限に生かすことができたことに、本当に感謝している。

日本初の風刺雑誌—横浜の「名物」

Sonja Hotwagner
(ハイデルベルク大学)



横浜の街並、人気の臨海地域、ランドマークタワー、そして日本最大の中華街を散策していると、この街の国際的な雰囲気を感じることができる。山手地区の旧外国人居留地、外国人墓地、そして有名な赤レンガ倉庫は、徳川（江戸）末期から明治初期の横浜の活気あふれる暮らしの様子を今に伝えている。

1854年、日本は開国を迫られ鎖国を解いた。その後5つの港が国際貿易のために開かれたが、その1つが東京に近い横浜である。さらに外国人居留地も作られた。イギリス人とフランス人が大半を占めた外国人居留者たちは、祖国から遠く離れた地にあっても、西洋的な生活様式と古くからの習慣を維持しようとした。彼らは地域社会で、競馬、コンサート、演劇、コーヒーパーティーなどを催し、そしてさらに新聞の発行をも始めた。ほどなくして、“Bluff（「断崖」の意）”と呼ばれる山手の外国人居留地は、日本と世界の文化交流の中心地となり、さらに近代的な「文明」を促進する役割を果たすようになっていった。山手で生まれ、日本の日常生活の中に伝えられていった目新しいものの1つに「風刺雑誌」がある。

日本の風刺雑誌の歴史を語るとき、切っても切り離せないのが、チャールズ・ワグマン（Charles Wirgman）の名前である。ワグマンは『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の特派員を務めるかわら、ユーモア溢れる評論誌『ジャパン・パンチ』を発行した。1862年に創刊されたこの雑誌は、日本初の風刺雑誌となった。

1859年6月2日、横浜は西洋人への門戸を開いた。

そのわずか2年後、ワグマンはこの新たな可能性を利用し、日本でのキャリアをスタートさせた。ワグマンはあっという間に日本の文化と社会になじんでいった。日本人女性と結婚し、日本式の服装を身にまとい、日本語をマスターした。外国人居留地という小さな世界の中で、この英国人男性の国境を越えた生活の様子は人々の注目を集めた。ワグマンは山手に暮らす当時の外国人たちから疑わしげに見られていたと、外交文書に記録されている。

ワグマンがほんの面白半分に行行を始めたジャパン・パンチは、最初の発行部数が約200部で和紙に刷られたものだった。同誌は特に日本に暮らす外国人の興味を誘い、横浜に加えて、東京、神戸、長崎といった外国人居留地や貿易地でも売られるようになった。挿絵に添えられる説明文の大部分は英語で書かれおり、西洋の読者向けに作られた雑誌だったにも関わらず、日本人の読者も引き付け、間もなく日本語版も発行されるようになった。

ワグマンの作ったこの長寿雑誌は、横浜の地元のトレードマーク、そして外国人コミュニティをつなぐ絆となった。

まったくかけ離れた文化的枠組の中に存在するヨー





ロッパの縮図のようなコミュニティの中で、人々は共通のアイデンティティと帰属意識を満たしてくれるものを強く求めていた。ワーグマンの書く挿絵と記事は横浜の地元の交易品と見なされた。西洋の外交官や居留者に対するワーグマンの痛烈なコメントや批判によって、コミュニティはその存在をよりいっそう確かなものにしたのである。その一方で、この英国出身の国際人は、ヨーロッパから日本にやって来た芸術家にとって最初の立ち寄り場としての役割を果たし、また彼のもとには西洋芸術について学びたいと熱望する日本人芸術家も集まってきた。そしてジャパン・パンチの製作には木版画を扱う日本人職人たちも協力するようになった。ジャパン・パンチは西洋式の風刺画の先駆けとなり、その後の数十年には同様の雑誌が多数作られた。そして風刺画本には、その誌名に「ポンチ」と付けられるようになった。

ジャパン・パンチは当初、外国人居留地内で起きた主な出来事を扱ったり、地域の有名人をからかうような内容を掲載していた。しかしごく限られたヨーロッパ人読者を対象にした雑誌であったにも関わらず、よく見てみ



ると、ジャパン・パンチがわずかではあるものの、日本の政治をすでにその風刺漫画の中に取り入れていたことがわかる。国際情勢を扱った思慮に富んだ漫画からは、ワーグマンが横浜の外国人居留地の外の状況に疎かったなどということは

なく、むしろ外の出来事に関心を持ち続け、柔軟な態度を取り続けたことがうかがえる。それにも関わらず、あるいはだからこそ、ジャパン・パンチはますます批判の声を強めていったのだろう。明治維新後の急速な近代化についてワーグマンは危惧していた。自身の描く風刺漫画の中で、ワーグマンはなんの疑いも持たずに西洋文化を模倣することについて揶揄している。

(写真：ジャパン・パンチの表紙、および横浜外国人墓地のワーグマンの墓：神奈川大学所蔵貴重書より)

現代日本における寄席芸術の伝承に関する考察

祝 鵬 程
(北京師範大学)



非文字資料研究センターを訪問した際、私は漫才と落語を主とした寄席芸術¹が現代日本の都市においてどのように伝承されているのかを探ることを課題とした。センターの先生方や院生たちの協力を受けながら、横浜・新宿・浅草・上野などの寄席を見学したり、落語家にインタビューしたりすることができた。国立演芸場の演芸資料室や神奈川大学図書館において文献資料を集めることもできた。以下では、調査の内容を報告したい。

劇場に目を向けてみよう。寄席の多くは、伝統的な形式と西洋的なそれとを共に備えている。寄席の舞台は、伝統的な形式を重視する形で設計されるが、そこには現代的な要素も多くみられる。特に、スピーカーやプロジェクターといった現代的な設備を用いることで、元来、限られた範囲のみに声を伝えることで成立していた寄席の小さな空間を拡大することに成功している。こうして、寄席は様々な層の観衆の需要に対応しているのである。

毎日がテンポよく進む日本社会において、そもそもは

「リトル・コミュニティ」(little community)²に対応する形で存在していた寄席も、かなりの速さで発展している。古典落語では伝統的な噺が話され、基本的には伝統的な型に沿って演じられている。そこでは、師匠を真似て技を学ぶという伝承の方法が重んじられ、落語家の服装や小道具にも、伝統的なものが用いられている。その一方で、観衆の好み、とりわけ若者たちの「笑いのツボ」が変化する中で、演じ方は様変わりを見せてもいる。落語家は、タイムリーな話題を幕開きのセリフとし、噺全体に軽やかなリズムを与えるのである。

反対に、漫才の伝承は個人化が進んでいる。ネタを書く作業は芸人自身の個性に任され、脚本はすべて新作のものである。さらに、ある特定のコンビはある特定の演目にしか登場しないという状況も生まれている。特に、お笑いビジネスに特化した吉本興業が養成所を設立し、現代的な喜劇を取り入れて芸人を養成するようになると、漫才のネタ作りや演出はよりいっそう商業ベースや